

vol.19

選書者：岩田奎

(俳人、俳句同人誌『群青』『オルガン』同人)

●『成分表』

著者：上田信治

漫画『あたしんち』の共作者にして俳人のエッセイです。俳句を書く人が生活しながら頭の中で考えていること、その温度感をこの本はうまいこと掬いあげているような気がします。だれかに「俳句ってなんなん？」と訊かれたら、私はこの一冊を差し出します。

●『AI 研究者と俳人人はなぜ俳句を詠むのか』

著者：川村秀憲, 大塚凱

だれかに「俳句ってなんなん？」と訊かれて、二冊差し出してよかったら、私はこれも差し出します。俳句を生成する AI の開発にかかわった研究者と俳人の対談形式の本。かれらのゴールは「いい句をつくる AI をつくる」ことではなくて、「AI の開発を通して、人間ってなんなんだろう、そんな人間の詠む俳句ってなんなんだろう」を探ることなんだそうです。

●『神戸・続神戸』

著者：西東三鬼

〈露人ワシコフ叫びて柘榴打ち落す〉〈おそろしき君等の乳房夏来る〉などの句を生み出した奇怪なダンディ俳人、三鬼の回顧録。東京に妻子を残して逃げるように神戸のホテルに流れついた謎の中年男性・三鬼によって、同じく流れ者の外国人や日本人との奇妙な日常が描かれます。戦時中とは思えない色鮮やかな祝祭性と、死の気配。神戸っていいなあ、と思います。

●『自分の仕事をつくる』

著者：西村佳哲

会社の友達がこれを教えてくれました。いろいろな仕事をするいろいろな人への取材の本です。「読んだあとになにかやりたくなる」という観点では、この本はピカイチだと思います。働くということが好きになります。とはいえ、「そんなうまいこといかないよ」と思ったりするような、いま働くということがあまり好きでないときに出会って反感をもつにもいい本だと思います。ぎりぎりおしつけがましくない本です。

●『民主主義の死に方 ―二極化する政治が招く独裁への道―』

著者：スティーブン・レビツキー, ダニエル・ジブラット

明日からわたしたち有権者ができること、みたいな話はあるありません。政治家経験はないが世直しで出馬したぜ！みたいなニューフェイスの人が急にトップになるといかによくないかということが、歴史から語られます。統計的には、そうみたいです。古くさくて野暮ったく見える政治家という仕事も、なかなかどうして智慧と経験の大切な「仕事」だということですね。